

# 明日への学び

2015年 1月21日 発行  
 発行：福井県教育委員会  
 福井県学力向上センター

TEL：0776-20-0295

メール：[gakukyousei@pref.fukui.lg.jp](mailto:gakukyousei@pref.fukui.lg.jp)

## 「福井教育フォーラム」開催 ～特集号～

「福井から変える 日本の教育 –これからの学力向上の方策を探る–」をテーマとして、10月16、17日の両日、福井市のフェニックスプラザを主会場に「福井教育フォーラム」が開催されました。北は北海道から南は沖縄まで、全国41都道府県から729名の参加があり、国外からは、遠くカザフスタンからも参加がありました。初日は、参加者全員が第1会場に入りきれず、第2会場も設置するほどの盛況ぶりでした。日程の概要は、下のようになっています。

### <1日目(10月16日)>

#### ①講演(13:20~14:20)

演 題 「福井県の学力・体力がトップクラスの秘密」  
 講 師 大阪大学大学院人間科学研究科教授 志水 宏吉 氏

#### ②シンポジウム(14:30~16:45)

テ ー マ 「考えよう、これからの学力向上に大切な視点」

シンポジスト

大阪大学大学院人間科学研究科教授 志水 宏吉 氏 文部科学審議官 前川 喜平 氏  
 東京大学大学院教育学研究科教授 秋田喜代美 氏 福井大学大学院教育学研究科教授 松木 健一 氏  
 茨城県阿見町立朝日中学校教諭 高柳 宏子 氏 福井県教育委員会教育長 林 雅則 氏  
 コーディネーター 日本教育新聞社編集局長 矢吹 正徳 氏

#### ③意見交換会(17:30~18:30)

### <2日目(10月17日)>

#### 学校公開と本県教員、児童・生徒とのディスカッション(9:00~)

- ①授業名人による身のまわりの事象を活かした算数指導  
 (福井市旭小学校)(坂井市立春江西小学校)(大野市下庄小学校)
- ②授業名人による身近なものを教材として活用した理科指導(福井市進明中学校)
- ③授業名人によるペア活動等で文章理解を深める英語指導(福井県立丹生高校)
- ④一つの部首からつながりのある複数の漢字を学ぶ「白川文字学」漢字指導(福井市宝永小学校)
- ⑤礼を重んじる教育活動を基盤とした学習指導(永平寺町永平寺中学校)(永平寺町上志比中学校)
- ⑥教職大学院と連携した教科センター方式での授業研究(坂井市立丸岡南中学校)

本号では、この「福井教育フォーラム」の詳細を報告します。各方面から著名な方々がシンポジストとして来県され、貴重な話をたくさん聞かせていただくことができました。少し長い報告になりますが、できる限り多くの情報を盛り込みました。講演者やシンポジストからは、福井の教育に対する評価だけでなく、将来についての提言もいただいています。福井の教育を再認識すると同時に、これからの教育の方向性についても考えてみてください。

#### <目 次>

○「福井教育フォーラム」報告		○「福井教育フォーラム」報告	
志水宏吉氏 講演	P 2	学校公開	P 15
シンポジウム	P 8	○お知らせ	P 20

## 講演

## 福井の学力・体力がトップクラスの秘密

大阪大学大学院人間科学研究科教授 志水宏吉氏

福井教育フォーラム第1日目は、開会行事のあと、大阪大学の志水宏吉教授の講演から始まりました。第17号でも志水教授を中心とする研究グループのインタビューをお届けしましたが、ここでは、講演の要旨をなるべく志水教授の表現に近い形でご報告します。講演の途中では、共同編集者の前馬優策氏も「本」の内容を紹介されています。第17号も参考にしながらお読みください。

## ○福井の教育の秘密について考える

今日は「福井県の学力・体力がトップクラスの秘密」についてお話をさせていただきます。福井県内では何と新書売り上げベスト3に入っています。元々は「福井の教育の良いところ」といった地味な題でしたが、出版社の意見でこんなセンセーショナルになりました。この本は、私一人ではなく、大学院生たちと協力してやった仕事です。

今日は、私の前置きの後に、執筆メンバーの一人である大阪大学講師の前馬が、「饅頭の餡」に当たる部分を簡単に紹介します。その後に、私が理屈の部分話を話してまとめさせていただきます。

私はサッカーが好きなのですが、日本はブラジルに惨敗続きです。そのブラジルも、この間のワールドカップでドイツに歴史的な大敗を喫しました。ブラジルは、サッカー大国で、文化と伝統が受け継がれてきたチームですが、ドイツは、一時競技力が落ちたのをテコ入れして、ワールドカップ優勝まで持ち直しました。伝統と育成がしのぎを削っているわけです。

ご存知のように、福井県は学力トップクラスです。秋田県と常にしのぎを削っています。体力テストもほぼトップの位置にいます。それで、その秘密について考えたということです。

この本には、昨年、随分と学校に入らせていただき、いろいろな方の努力をまとめた内容がありますが、その内容を今から前馬が説明します。



## ～前馬先生の福井の教育についての説明～

共同で編者を務めました前馬優策です。元小学校教諭の川畑和久、元中学校教諭の野崎友花、そして福井市出身の大学院生・中村瑛仁と私と志水先生の5名でチームを組んで、福井県の調査をさせていただきました。

実際に見せていただく中で、驚くことが数多くありました。福井の先生方に話をうかがうと、「特にすごいことをしているつもりはありません。あたり前のことをしているだけです。」と言われます。その中で、何とか福井のすごいところを文章化したいと思いました。ここでは「小学校の秘密」

「中学校の秘密」「教師の秘密」「地域家庭の秘密」という4つの観点に分けて説明していきたいと思います。

## ○小学校の秘密「一時一心」

最初に「小学校の秘密」のキーワードとして、「一時一心」をあげました。これはメンバーの川畑の造語ですが、一つのことに一心に取り組むことと定義しています。福井県の小学生を見ると、



何事にも一生懸命取り組む様子が、非常に印象的だったわけです。学校としての取り組みも見たいと思います。

右の写真は、グループで話し合いをしている様子です。左側（下）は教室の黒板です。その日の授業の見通しがわかるようになっています。福井県内の小学校では、めあてや授業内容が子どもたちに周知され、学習に集中力を傾けられる環境が整えられていると思います。



次に、体力づくりです。福井県の体育の授業を見て、「子どもたちがよく走るな」「運動量がすごいな」と思いました。多くの課題が出され、子どもたちは一生懸命応えていました。加えて、日常的な取り組みもたくさん行われています。福井県には、「グーパー運動」というものがあります。福井県の体力の数値はどれも高いのですが、ある年、握力の順位が8位ぐらいで、改善の余地があるということになり、「グーパー運動」が提案されました。教育委員会から方針が出されると、

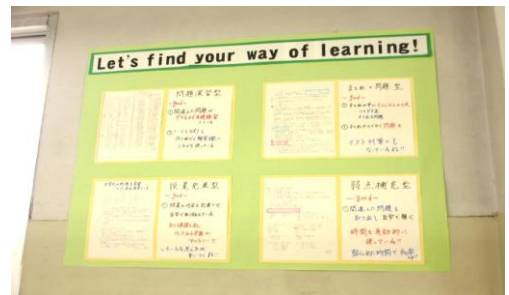
各小学校に広く浸透して、実際の活動が行われることも驚きです。

右の写真は、放課後学習です。福井県は体力や学力に加え、忍耐力や仲間づくりなど、総合的に子どもたちを鍛えていることが見てとれました。先生や保護者など、関わる大人がいろいろな形で子どもたちに達成感を感じさせています。そのために適切な課題と目標を示すこと、そして達成度をフィードバックすることが行われていました。それによって「一時一心」に取り組む力が育成されているのではないかと思います。



### ○中学校の秘密「あたりまえ」

次に中学校を一言で表すと、「あたりまえ」という言葉が一番しっくりくると感じました。朝の学習だったり、宿題を確実にやりきることだったり、小テストへの取り組みであったり、「あたりまえ」が日々の生活の中で積み重ねられていることが、福井県の子どもたちの実力につながっていると感じます。自主学習ノートの提出にしても、優秀なものやユニークなものが掲示される(右)など、「あたりまえ」の質を高める、ハードルを上げる工夫が、日々の指導の中で行われていました。



中学校でもう一つ特徴的だったのが、「きっちりする」ことを求める生活指導でした。左の写真は訪問した学校の後ろのロッカーですが、カバンや問題集がいつも整然と並んでいました。右（下）は無言清掃の様子です。きっちりと雑巾で拭き上げていく様子を見ることができました。



「あたりまえのことをあたりまえにする」と言っても、続けることは難しいですし、気が抜けることもあります。福井県の中学生の中に、この「あたりまえ」を支えるものがあるのではないかと考え、まとめてみました。



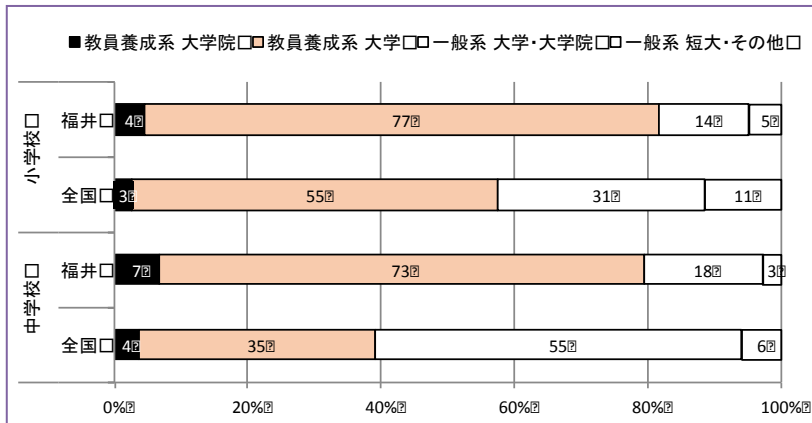
第一に、教師のきめ細かい丁寧な指導が生み出す信頼関係です。生徒と教師の間に強い信頼関係があり、「しっかり見ていますよ」と生徒に伝わる指導が行われています。

第二に、学校全体で取り組む力の強さです。校内の「あたりまえ」に対する共通理解があり、先生方が団結して同じ指導を行い、「あたりまえにするのがあたりまえ」という空気をつくり上げているのです。

第三に、伝統に満足せず、さらに上を目指す空気です。新しい伝統をつくらうとしたり、「あたりまえ」を新しい形にしようと工夫したりされています。

## ○教師の秘密「まじめな教師」

次に「教師の秘密」について見ていきます。福井県の先生について質問すると、ほとんどの方が「まじめですね」と言われます。そのまじめの中身について突き詰めてみました。



統計的な特徴もあります。教員養成系出身の先生の数値が、全国的な数値と比べて非常に高くなっています(左表)。これが教員の専門性につながっていること、隣接校種の免許、複数免許を持っている人が非常に多いということが見えてきました。

次に福井県の先生方のまじめさとは何かということです。第一に、授業できちんと教えるための授業準備を惜しみません。第二に、研修が非

常に熱心に行われています。第三に、宿題と生活ノートの丁寧な点検です。私たちが訪ねた学校でも、これを毎日かと思うくらいの提出物の量でした。第四に、組織の一員としての動きです。そして最後に、行政施策に対する手を抜かない姿勢があります。示された方針を一丸となってやっという姿勢です。

一方で、福井県の先生の課題を尋ねると、「まじめすぎる」「先例を踏襲する人が多い」「新しいことにチャレンジできない」ということがあがりました。そこで本書では、新しい時代の教員養成ということで、福井大学教職大学院の取組みも紹介させていただきました。

右の写真は、「ストレートマスター」と呼ばれる大学卒業後そのまま大学院生になった学生と、「スクールリーダー」と呼ばれる現職教員をしながら在籍する学生とが、実践について報告したり議論したりする、「カンファレンス」の様子です。この取組みによって、自分の実践を振り返りながら、さらに質を高めていくことができるようになっているのです。



## ○地域・家庭の秘密「わたしには良いところがある！」

最後に、地域・家庭の秘密についてまとめさせていただきました。

福井県の子どもたちは、全国学力学習状況調査でのアンケートで、「わたしには良いところがあると思う」という質問に肯定的に答えた割合が、非常に高くなっています。全国的に見ると、肯定的な答と学力の高さとはある程度の相関があります。つまり、自分に自信がある、言い換えると「自尊心」が高い子どもは、学力も高いのです。福井県ではなぜ子どもたちがこの感情を持てるのかということ、地域や家庭との関わりから見ていこうというのが、ここでの問題意識です。

福井県の特徴として三世同居が多い、共働き率が高いということがよく言われます。この2つにも相関があることは以前から言われていますが、祖父母が同居または近くに住んでいることが、子どもたちにどんな影響を与えるのかを考えました。第一に生活が全般的に安定すること、第二に子育ての安心感が生まれること、第三に節度の教えが確実になされることがあがりました。厳しく戒めるのではなく、節度を教えてもらう、そのように話した人が多いということです。

学校には、保護者だけでなく、地域の方々がさまざまな形で関わっています。「子どもたちのためにとやっているが、元気ももらっているのは自分たちだ」「先生は本当に頑張ってくれているので、何とか手助けしたい」という話をたくさんお聞きしました。福井県では、学校が、「子どものために」という思いを一つに集める場所として機能していると感じました。そうしたつながりで学校が支えられ、子どもたちが支えられているのです。

延べ100人ぐらいの方にインタビューを行ったり、調査に入らせていただいたりしました。ご協力いただいた方々に、この場をお借りして感謝の意をお伝えしたいと思います。

## ○「順位を競う」

ここから再び志水が話をさせていただきます。

2007年の全国学力学習状況調査の実施以降、さまざまなデータを分析してきましたが、子どもたちの学力格差は縮まってきています。昭和30年代、40年代の学力テストと比較しても、都道府県間の格差は半分くらいになっています。その中で順位を競っているのです。どの地域の先生方も良い仕事をされていると思っています。ただ、序列がつくと頑張ってしまうのが日本人の性（さが）です。実際はどの都道府県も、あるハードルをすでにクリアした上での争いだということは理解しておいていただきたいと思います。



## 〇つながり格差

福井の教育を説明するうえでのキーワードは3つです。私が作った言葉ですが、「つながり格差」「群れる力」「鍛える文化」です。

まず「つながり格差」です。2007年の学力状況調査のデータを見て気がついた見方・考え方です。2007年は、秋田県と福井県がトップを競っていました。今日トップの秋田県は50年前には最下位近くで、逆に現在低迷する大阪はトップクラスでした。変化の要因について、例えば、県の人口、教員一人当たりの児童生徒数、塾の数など、経済的な要因も含めて、できる範囲でデータの分析をしました。その結果、「離婚率」「持ち家率」「不登校率」、この3つの要因が学力に一番強く結びついているという結果が出ました。

「離婚率」というのは、家庭・家族と子どもとのつながりの豊かさで、離婚率が高いということは、それが揺らいでいることです。離婚率の高い県の子どもたちの学力は厳しい状況にあります。家庭・家族とのつながりが学力の要因と言えるのではないかと考えるわけです。

「不登校率」は、学校の教師と子どもとのつながりです。福井県と秋田県は何回も訪問させていただきましたが、様子が似ている感じがします。先生方は、地域の方々や保護者から、敬意・尊敬の念で見られています。子どもたちが登校を渋っても、「学校には行きましょう」「行きなさい」という声かけや社会的圧力が相対的に強いと感じます。そして、子どもたちも学校に来て頑張ろうとするのです。「学校や教室」と「子どもたちや保護者の方」とのつながりですね。

最後は、「持ち家率」です。日本の持ち家率は、富山県、秋田県、福井県が75%水準です。経済的な要因も関与していますが、持ち家である結果、地域との連携が深くなり、子どもたちが大事にされ、機嫌よく学校に通い、学習している状況がうかがえます。持ち家率の高さは、近隣の地域・社会とのつながりの豊かさを表していると位置づけられます。

今お話ししたのは別に、5年ほど前に、5つの政令指定都市の小学校100校の子どもたちと保護者に対する調査を行い、人間関係のネットワークを豊かに所有しているかどうかで、子どもたちの学力にどのような違いがあるかを調べました。結果は同様でした。収入についても調べましたが、収入別の階層と学力との相関は非常に高くなっていました。この結果には、文部科学省も着目し、対策を考えようとしています。我々が言いたいのは、収入の多寡だけではなく文化資本です。家庭の教育的環境を文化的環境と言いますが、これも学力に影響を与えています。家庭に書物がたくさんあるとか、保護者とのコミュニケーションが密で宿題を見ってくれるかといったことが、学力と関係しているのです。要するに、子どもを取り巻く人間関係が学力に効いているということです。逆に、それが脅かされた環境にある子どもたちの学力は傾きやすいということです。

またスポーツの話になりますが、フィギュアスケートの高橋大輔選手が、岡山で引退を表明され

ました。「生まれ育った土地で会見したいと思った。私は岡山に生まれなかったらスケートをしていなかった。」と話されていました。「家族、親族も含めて、いろいろな人との関わりでここまでやってこられた。それがなかったらここまで続けられなかった」ともおっしゃっていました。

私は、学習もスポーツと同様のことが言えるのではないかと強く思います。自分自身がそうです。自分も家族をはじめ、恩師、旧友がいたからこそ、今ここに立って偉そうに話す立場になったのだと思います。別の人間関係だったら、別の仕事をしていたかもしれません。「つながり格差」とは、そういう事態に言及する言葉となります。

## ○群れる力

「群れる力」とは、自分と近いものからなる集団の中で役割を果たしていく能力です。一般的には集団性または社会性につながる言葉だと思います。福井の子どもたちは地域・家庭・学校のつながりの中で、非常に健全な形の「群れる力」を育てていると感じました。

私は兵庫県西宮市、かつては神奈川県川崎市に住んでおりましたが、近ごろの子どもは、ここで言う「群れる力」が弱まってきていると感じます。そういう状況を見ていて福井県に来るとほっとします。子どもたちが真っ当な力を育てていると思います。

私の友人に、ニホンザルの研究をしている行動学者がいます。一言に動物の群れといっても種によって全然違い、さらにはニホンザルの中でも、地域によっても群れの文化が違うそうです。人間にも同じことが言えるようなので、「群れる力」と一言で言っても、実質は同じでないと言えます。ただ、「群れる力」とは集団生活の中で自ずと育まれるもので、福井県では高水準で維持されています。都市部だけでなく日本全体かもしれませんが、虐待やネグレクトの問題が起これ、家庭での人間関係が崩れかけています。子どもが育つ環境、大人が育つ生活環境が変わってきて、動物としての人間が本来持っていた生活の形や、つけていた力が損なわれてきていると私は認識しています。

本では、福井県の食文化の誇りである越前ガニを例に挙げました。カニは、右足5本、左足5本を使い、縦にも歩けますが普通は横に歩きます。カニが両足をバランスよく使って縦横無尽に移動するのは、地域・家庭の系列、学校の系列が良いバランスで機能しているのと同じに見えます。

「群れ」を私はポジティブにとらえていますが、群れに安住しているだけでは駄目なのではないかという意見も当然あります。そこで、「群れる力」に対して「交わる力」というものが考えられます。「交わる力」とは、異なる力を持つものと交流したり協働したりする力です。その点では、福井県の子どもたちには、いや大人たちにも、課題があるかもしれません。福井県の先生方は、あたりまえのことを普通に、まじめにこなされており、これは基本的に長所だと思います。しかし、違った環境で、または違ったものをもつ他者と力を合わせて何かをすることを考えた時には、未知数な部分もあると思います。この点を指摘しておきたいと思います。

## ○鍛える学校文化

ここまでの話は、地域・家庭の中に学力の基盤があるということです。その上で福井県には、子どもたちをとことん「鍛える」学校文化、伝統が顕著です。授業の面でもそれ以外の面でも、何事にも一生懸命であり、それは、子どもたちだけでなく先生たちも同じです。

嶺南地方の小学校で、遠泳大会の練習を見学させていただきました。5、6年生でしたが、先生方だけでなく、地域の方や保護者の方も水の中で応援や見守りをされています。初めて海に出た子もいて、怖がって泣き叫ぶ姿も見られましたが、頭を持って海に沈めたり、ボートに取りすがろうとするのを突き落としたりしていました。本番はほぼ全員が泳ぎ切ります。将来海難事故に遭った

ときにこの体験が生きてくると考えて、厳しく行われているそうです。もし大阪で同じことをしたら、クレームだらけでしょう。言いたいのは、家庭の方、地域の方と先生方がスクラムを組んで、納得ずくで子どもを鍛えているということです。その中で、子どもたちが自分をマックスまで高めていくのです。

もう一つ、伝統の無限清掃を見学しました。我々が訪問した中学校でも、小学校でも行われていましたが、広い体育館を、先生方も一緒に雑巾がけをされていました。その学校では「同行二人」という仏教用語を使っていました。子どもたちと先生と一緒に何かを成し遂げることを大事にしているのです。子どもたちを鍛える、でも先生方もその中で鍛えられています。

この本には、体力についても述べてあります。遺伝的にある県の子子どもたちだけ体力が高いとは言えないはずなので、有利な県、不利な県があるとは考えにくいです。しかし、福井県の体力は、握力以外はほぼトップレベルです。それは学校の中で鍛えているからです。訪問した小学校では、20分休みは20分間みんな走っています。天候の悪い日は縄跳びです。体育の授業では、45分、50分間、体を動かしていました。鍛える文化なしでは体力一番はないのではないかと思います。

### ○A学力を伸ばすことでB学力も伸ばす

学力ツートップの秋田県と福井県の基本的な性質の違いは、次のように考えています。学力調査にはA学力とB学力があります。秋田県はB対応の授業を十数年くらい前から行い、その中でBの表現力・判断力・思考力を獲得しています。福井県はA学力に時間をかける中で底辺を広げ、頂点をアップさせるといった形をとってきたように思います。B対応型の授業をしてBの力がアップしているのではなく、授業以外の教育面も含めて、基礎基本をばっちりやることでBもAに伴ってアップしていくという形です。別の研究者も同じような指摘をしています。

### ○福井の課題

本の最後に、福井県の課題についても少し書かせていただきました。福井県の教育関係者によると、第一の課題は個性的な人材が育たないことです。群れる力、交わる力とも関連しますが、「井の中の蛙」の状態を抜け出して、自分とは異なるものを有している他者と出会うしかないのです。

それと関連して、第二に、福井県は小中学生の学力は高水準だが、高校生の学力はそう言えないということです。特に難関校といわれる大学への進学が、近年停滞しているという数字が出ています。例えば、福井県内から東京、大阪、京都の難関大学に進学した先輩に高校で補習をやってもらったり、都会の様子を伝えてもらったりして、モチベーションアップを図るのはどうでしょうか。極論ですが、東京都内に全寮制の福井県立高校をつくるのはどうでしょうか。「東京にはこんなにすごい奴がいる」「油断ならない状況だ」と実感する場を持つのもよいでしょう。その他にも、改善傾向にはありますが、数年前に不登校率が高かったことも指摘されています。時代の変化に伴い、鍛える文化についていけない生徒も出てきているのです。

福井の教育には、日本の教育の伝統的な不易の部分が色濃く残っています。まじめな日本人ですから、課題を見つけて改善していこうと考えがちですが、もともと教育は不易が基本です。現代は、その不易の部分さえ変化していく時代です。「時代の流れだから仕方がない」と改革に舵を切るのか、「いや、まだまだやれる」と旧来のやり方を守り続けていくのか、見きわめることが重要になってきています。しかし、福井県はもっと自信を持っていいと思います。他県の先生方は、今日、明日といろいろな刺激を受けるでしょう。福井の良さを持ち帰って、そのまま移植することはできないかもしれませんが、日々の実践を見直す契機、参考としていただけたらと思います。

## シンポジウム

## これからの学力向上に大切な視点

## ■シンポジスト

志水 宏吉 大阪大学大学院人間科学研究科教授  
 前川 喜平 文 部 科 学 審 議 官  
 秋田喜代美 東京大学大学院教育学研究科教授  
 松木 健一 福井大学大学院教育学研究科教授  
 高柳 宏子 茨城県阿見町立朝日中学校教諭  
 林 雅則 福井県教育委員会教育長

## ■コーディネーター

矢吹 正徳 日本教育新聞社編集局長

志水教授の講演の後は、前川文部科学審議官をはじめ、豪華メンバーによるシンポジウムが行われ、福井の教育の特徴の話を中心として、今後の学力向上に必要な視点を探っていきました。シンポジストのみなさんには、熱い議論を展開していただき時間が不足するほどでした。みなさんそれぞれのお言葉には、大変な重みを感じられます。少し長い報告になりますが、その重みを味わってみてください。なおコーディネーターは、今回のフォーラムの共催である、日本教育新聞社の矢吹正徳編集局長に務めていただきました。

矢吹 まず、本日までご参加の皆様にご挨拶申し上げます。先ほど志水先生のご講演がありましたが、本日のシンポジストお一人ずつがご講演いただけるような方々ですので、私はタイムキーパー的役割を務めたいと思っております。本日は、まず「福井の教育の特長について」、次に「学力向上をつなげていく教育システムの在り方について」、最後に、「これからの人材をどのような方向でどう育成し鍛えていくか」という三本柱で話を進めていきます。



## 福井の教育の特長は？

## ○教師・学ぶ時間・学ぶ内容、それぞれのつながりが強い

秋田 表には見えない学校内での先生同士のつながり、子どもの学習時間のつながり、そして地域に誇りを持てるような学習内容のつながりの3点をポイントに話をします。この3つのつながりが福井の強みであり、他県も学んでいけることではないかと思えます。

まず、「先生方のつながり」についてです。地区の教研などが盛んなため、教師のネットワークがしっかりしています。県全体に学校力・教師力を上げる仕組みがあります。授業研究も、校内・校外両方でうまくつながっています。県教委・市町の教育委員会の支援のうまさ、指導主事の力量の高さ、そして先生の力量の高さですね。福井のように、ある学校でやったことがすぐ全県に波及する地域は少ないと思います。校外の研究会もやりっ放しにしない、1回で終わらない研修体制ができあがっています。一人ひとりに力があると同時に、その力を支える、教師のための文化資本・社会資本がしっかりできているのが福井の特長だと思います。

次に、「学ぶ時間のつながり」です。たとえば言語力をつけることにしても、話し合いだけでなく、考える時間、書く時間などが保障されています。だから時間の流れがうまくいきます。さらに、学校生活全般にも、生活と学習のつながりがあります。合唱活動や修学旅行なども自律的に運営で





きる仕組みをつくり、授業とそれ以外の学校生活がうまくつながって両面で充実しているのが福井の特長だろうと思います。

最後に、「学ぶ内容のつながり」です。私は福井独自の「福イングリッシュ」という英語の副教材が好きです。白川文字学でも、生活や意味とつなげた指導が重視されています。自分たちの地域の誇りが教材の中にも埋め込まれていることに加え、先ほど志水先生が述べられた「鍛える学校文化」があることで、子どもたちは自分たちの地域に誇りを感じるようになっていきます。

### ○最終的に大切なのは「人（先生）」

**高柳** 私は平成24年度に永平寺中学校で1年間勤務させていただき、「やはり先生たちが大事だな」と強く感じました。

永平寺中学校の子どもたちは宿題をきちんとやってきます。もし忘れても休み時間などで何とかしようとします。この姿を見ていて、小学校からそういう積み重ねをしてきたのだと感じました。しかし6年間担任が同じはずはなく、1年だけで習慣が身につくとは思えません。途中で手を抜く担任がいれば、身についた習慣は崩れます。つまり、「多くの先生方が同じ方向を向いて地道に根気強く指導してきた結果が、子どもたちのこの姿なのだ」と感じたのです。

教員みんなが同じ方向を向くのは難しいものですが、福井県ではそれができていると思います。



### ○学校の中で学び合うコミュニティ

**松木** 福井はテストの数が多い一方、子どもたちが参加する行事も多いと思います。地域や学校によって行事には違いがあります。たとえば、朝学習をやっていたり、掃除に特徴があったり、朝読書に熱心であったり、生活指導や文化祭に特徴があったりなどです。学校ごとに特徴があると先生方は大変だと思うのですが、異動してきたばかりの先生が、「本校では」と言われます。去年までは別の学校で別のやり方で「本校では」と胸を張ってきたのに、です。学校の特色が地域によって違うため、異動のたびに、先輩・同僚の先生と一緒に学び合っていきます。そして、その学校の大切にしてきたものに意味づけをして取り組んでいきます。そのような、先生方が学び合っていくコミュニティが安定して存在しているのが福井ではないかと思います。それが子どもたちの学力検査を超えた学力につながっているのではないかと思います。

ただこれから、先生方の大量退職の時代において、コミュニティを守っていけるか、生活環境が変化する中で地域・学校の文化を守っていけるかは難しいところです。もう一度、それを維持する方向を検討することが重要になると考えています。

### ○「学びの場」をつくり「伝え（教え）方を工夫」する

**林** 福井の教育の良さは、風土や勤勉な県民性にあると言われます。それもあってはと思いますが、取組みについても申し上げたいと思います。

県民の教育に対する熱心さの象徴として、県議会内の教育の常任委員会があります。他の委員会が2時間くらいで終わるところを、教育の場合はお昼を挟んで5時間ほどをかけて、今後の教育について話し合われます。議会でも教育論議を展開する雰囲気があります。

全国学力・学習状況調査についても、他県では公表の問題等で知事と教育委員会が対立するような話を取り上げられますが、福井の場合、知事と教育委員は2か月に1回程度、教育の中身について議論する場があります。市町の教育長と私も月に1回は議論しています。先ほどから「つながり力」と言われていますが、様々な形でつながっています。そういう関係だにご理解いただいた

上で、2点に分けて話をします。

一つは、「場をつくる」ということです。学校では学びの場です。家庭や地域では生活して子どもたちを支える場です。政策的には少人数学級を推進しています。福井では中学校1年生は30人学級です。次年度、小学校4年生を35人編成にすると、小・中学校9年間で、すべて35人以下になります。永平寺中学校の校門の礼や無言清掃がよく紹介されますが、これも学校で「場をつくる」指導の一つです。道徳教育においては、国が中断している間も、由利公正や橋本左内といった郷土の偉人を題材に、「こころのノート」を独自に作ってきました。「私の夢カルテ」という形で、自分たちの成長を記録することもしています。小学校5年生は全員がハーモニーホールでオーケストラの生演奏を聞くといった、芸術教育の場もつくっています。



二つ目は、「伝え方を工夫する」ということです。「白川文字学」が象徴的です。福井出身の白川静先生の研究を学校教育に取り入れようと県から働きかけたところ、それぞれの先生の工夫が学校の中で広がり、それが外の学校に広がっていったということがあります。

昭和26年から県独自の学力調査を続け、現場では授業改善に取り組んでいます。さらに、授業の上手な先生を授業名人に認定し、授業を録画して、若い先生方が研修に出かけなくても、学校で教え方を学ぶ機会が持てるよう、行政もサポートしています。

## ○福井は次の新しいステージへ

**前川** 今年度の調査では、全国的に学力の底上げが図られ、平均の低い県と高い県の差が縮小してきています。福井は平均より下の中学校が皆無で、低い10校の平均でも全国平均以上です。

次に学校における指導と学力との関係です。平均正答率が高い学校は、学習意欲も高く、家庭での学習時間も長く、学習規律が徹底されています。私語が少ない、話す人の方を見て聞くなどです。指導としては、間違いをきちんと振り返らせること、学級全体で取り組むような課題やテーマを与えること、様々な情報を使った資料や調べ方に目を向けさせることです。特に国語や算数については、「発展的な学習を行っているか」「算数では実生活における事象との関連を図っているか」も大切です。「言語活動をすべての教科で行っているか」「思考を深める発問ができているか」「発言や活動の時間が確保されているか」「話し合ったり発表したりする機会があるか」も相関が高いです。総合的な学習の時間については、「単なる体験活動ではなく探究活動まで深まっているか」「課題の設定からまとめに至る過程を意識させているか」も大切です。

次に、児童・生徒の学習習慣・生活習慣との学力の関係です。自尊感情・自己肯定感との関係が大きいですね。生活習慣では、スマホやゲームとの関係が高くなっています。中学校数学Bで一番差が大きく、利用が30分未満の子と4時間以上の子では20ポイント近い差があります。質問紙調査でも、スマホ・ゲームに費やす時間が毎年伸びています。単純に禁止するのではなく、興味・関心をプラスに転じる方法も考えていく必要があるのではないかと思います。

以上が今年の学力調査の大雑把な分析ですが、これは学力の一面に過ぎないと意識することが必要です。福井県は基礎学力をつける基盤があるので、新しいことにチャレンジしてほしいと思います。もし学力調査の結果が下がっても、そのときは、別のことで注目されていれば良いのです。

国際学力調査で見える日本の弱点は、たとえば数学や理科について、「その教科を好きではない」「勉強したことが将来役に立つとは思わない」と答える子どもの率が、他国と比べて高いことです。学習することの意義の理解や学習意欲は低いのです。それでも点数が高いのは、テストのために勉

強しているからだと思うのです。そういう傾向は日本全国にあります。

福井の特徴は、国際比較をしたときの日本の特徴とも言えます。日本の良いところが集約的に見えるのが福井県や秋田県ではないでしょうか。しかし逆に、日本の弱みが見えてくる部分もあります。それをどう克服し新しい時代の学力に向けていけるかが今後の課題だと思います。

## 学力向上につなげるための教育システムについて

### ○教師の支援と同時に、学校そのものを支援する

**松木** 教師が他の専門職と決定的に違うことは、自営業としては成り立たないことです。大学で個人研鑽して帰れば学校が良くなると考えていたことは、これまでの大学の失敗だと思います。大学は学校そのものを支援する必要があると思います。福井大学教職大学院の学校拠点方式とは、学校現場で、学校の課題を一緒に解決することを目指した、学校づくりのための仕組みだと言えます。

ただ、出会いこそがコミュニケーションの原点ですので、大学で異校種の方々と交流する機会をつくったり、ラウンドテーブル等を開いたりして全国の先生方と実践交流をしています。さらに、「子どもたちの学習活動を支えること」「探究的な学習を授業の中で作り出していくこと」が大切です。先生方には探究的な部分があると思います。先生方の探究する姿を見ながら、子どもたちも探究していく雰囲気をつくることが大切ではないかと思っています。

**志水** 教員は職場で学ぶのが基本で、外部で知識を伝達することを重視しすぎると本末転倒になります。現場をベースとした授業研究を、インフォーマルな部分も含めた研修をなくさないで、活力ある実質的なものにしていけるかという視点が必要になります。



### ○福井型18年一貫教育プログラムを共有化する

**林** 現在取り組んでいる新しい教育システム、先生方にどういう形で力をつけてもらうかについて大きく3点ほどお話しします。

一つは、教員の力を共有化し組織としての力を強くすることです。子どもたちは小学校入学から高校卒業まで新しい毎日を送りますが、先生たちは同じサイクルを繰り返します。他の校種の内容を認識しあいながら指導することが大切です。教員集団として共有化するための一つに人事異動があります。福井では7年程度での異動が一般的ですが、25%程度は異校種間での異動です。小・中学校在籍者の約半数が、小・中学校両方を経験しています。他に、縦持ちという独特の教科担任の持ち方や、授業名人の任命などがあります。忙しい中で情報を共有する方法を考えています。

次に、学校現場で先生方がどう学び続けていくかということです。秋田先生のお知恵もお借りして、教育研究所の機能を今年から変えました。それに伴って、従来の集合型研修の中から、いわゆる座学形式のものは通信型に変えました。映像で、学校現場や自宅でも見られることを前提に準備を進め、100本用意しようとしています。集合研修はロールプレイング方式にして、学校現場での授業を想定した実践型のものに改めていこうと工夫しています。

もう一つは、子どもの「交わる力」について志水先生のお話にありましたが、まず先生方にその力をつけていただくこと、派遣研修を充実させています。他県の学校や、教育以外の行政の場、産業・福祉・環境といった場所に派遣しています。東京事務所にも教員を1年間派遣し、東京の私学で学んだり、出版社に行ったり、文部科学省の会議に出させていただいたり、自分自身で仕事を探

して、県に情報を提供していただいています。

同時に、他県から教員を受け入れることで、福井の良い面・悪い面に気づくことができます。今年からは、「福井らしさを探る会」という、福井の特長を研究する自主的な場も立ち上がりました。

そういう中で、最終的には、子どもの目線に合わせた「福井型18年教育」ということになります。小1プロブレムや、義務教育から高校教育への接続に重点を置いています。5歳児と小学校1年生を結ぶ、保幼小接続カリキュラムを今年試行的につくりました。国語とか算数という教科を学ぶ前に、5歳児の遊びの中に学びの芽生えをつくっていきこうというもので、来年度からすべての幼稚園・保育所等で実践できるように進めています。中高接続という点では、一緒に授業研究をする場を設定していますし、来年度からは併設型中高一貫教育も始めます。地域においては連携型中高一貫教育も行っていますので、これらを充実させながら、最終的には福井型の一貫教育プログラムという形で共有することで、子どもたちの目線に立った教育に少しでも近づきたいと考えています。

### ○学校・地域の理想を支えていく仕組みをどう作るか

**秋田** 福井だけでなく日本全体で、授業研究をしたり、校内・学校間を超えて学び合ったりするシステムの構築が必要です。私が副会長を務めている「世界授業研究学会」という28か国加入の組織でも、世界中が日本の授業研究から学ぼうとしていています。ただ、多忙な中なので、伝達型はウェブ等も利用し、本当に対話が必要なところに焦点化してやっていくのが大事だと思います。海外がすごいと言ってくれるのは、その授業研究をお互い見合って語れる力です。さらに、学校が抱えている課題を一緒に考えていける力です。学校のニーズに応じながら、課題を調整して考えていける、大学の教員や指導主事、管理職などに世界の注目が集まっています。



研究紀要とか授業名人のDVDがふんだんにあり学びの機会が充実している、そういう仕組みをつくるのが大切です。福井では従来、幼児期は小学校の、小学校は中学校の学力の準備をするというように上を見てきましたが、高校の先生は中学校の、中学校の先生は小学校の、子どもたちの居場所や教師との関係、学級経営などを見るといった双方向の流れになってくると、より良くなると思います。保幼小の連携、地域との関わりについては、昔は福井では必要がなかったかもしれませんが、基盤づくりとしてやはり今後は求められてくると思います。学力だけではなく、社会情動的スキルとか、社会に出てから重要な力というのは、協働して目標を達成していく力です。それをみんなで伝えていくシステムを、どうつくっていくかということです。

**矢吹** 高柳先生、昨日の「福井らしさを探る会」で話題になったことを紹介してください。

**高柳** 今年県外から派遣された教員8名と、私のように以前お世話になった教員4名で、昨日、福井について話をしました。福井は年間を通じて下校時刻があまり変わりません。つまり家での生活もあまり変わらないから、リズムがつくりやすいのではないかと思います。他に、県が現場に伝えていることが、他県と比べて抵抗なく通るように感じます。あと、私がお世話になった永平寺中学校では、一日に黙想を8回ぐらいやっています。帰りの会の前に、心を静めて自分の一日を振り返る学校は、学力が高いという話も出ていました。福井の良いところをたくさん見て、私たちはそれぞれの県に帰ります。自分の県の課題ももちろん見えてきますが、自分の県の良いところもあって、福井の良いところとどのくらいミックスさせるべきかという話になりました。

**矢吹** 前川文科審議官には、教員の資質向上という部分で、課題となってきた問題とか、こんなことがこれから大事になるのかなという問題について、少しお話いただけますか。

前川 教員の資質向上は「採用（経年）研修の各段階を通じて」という言い方がされてきましたが、境目が融合してきています。採用と研修、あるいは養成と研修がクロスオーバーする事態が進行していると思っています。大学と教育委員会の関係も変わってきています。教員養成系の国立大学と教育委員会との関係が非常によくなってきています。

免許制度にはいろいろな問題点があります。たとえば10年研修と免許更新講習との重複感や小中一貫教育における免許の問題などです。免許制度については中央教育審議会の教員養成部会でも議論されていますが、大学の学士段階で学ぶべき内容についても見直すことになりそうです。さらに、小中一貫した教育をするという時期に、免許状が全教科の小学校免許と個別免許の中学校免許でいいのかという意見もあり、併任しやすい形に改めたらどうかという議論も起きています。小中一貫教育の一つのポイントは、小学校に専科教員を置くことです。特に英語、理科、算数でしょうか。学校を小規模化して小中を一貫して学校の規模を確保する際に専科教員がその教科を担当するというやり方です。そのためには、小学校の教科免許状、あるいは義務教育の教科免許状があってもよいのではないかと思います。今でも、中学校の数学の免許状で小学校の算数を教えることはできますが、総合的な学習や道徳、特別活動などの指導はできません。小中一貫校として運営する学校は多く、教えた経験のない教科を臨時免許状等で教える状況はできるだけ避けたいと思います。

資質向上という点で大きなテーマになるのは、初任地でどうするかということです。4プラス $\alpha$ とは、学士課程の4年間では不十分なので、採用までの1～2年の間を見習いとするものです。これは修士レベル化とつながってきます。教職大学院のストレートマスターをインターンとして扱えないでしょうか。インターンの代わりとして新採用研修もあります。教員は1年間条件付き採用期間として研修し、一人前になると本採用になります。これは県によっても違いますが、臨時任用講師経験者が採用に占める割合が高くなっています。現実的に、臨時任用講師期間はインターンになっています。こういった点を複合して考えながら、現実に即した形での制度化を考えなければなりません。現職教員の研修のための教職大学院も大切ですが、そのためには定数改善が急務です。教職大学院は全国に20余しかありませんが、すべての都道府県に整備し、教職大学院と教育委員会と現場との関係を、福井県と福井大学のようにつくってほしいと思います。



## 今後の人材育成について

矢吹 最後に、人口減少社会を迎え、海外に出ていかなければならないグローバル化時代を迎えています。一方で郷土を愛する力が学習の中に入ってきています。福井県は、高校卒業後3割が県外に行き、その後1割が帰る現状です。今後どのような人材育成を進めていきたいとお考えですか。

林 志水先生の本で「群れる力」と表現されているように、集団の安心感はありますが、学力調査の結果を見ても中位層に集中しています。下位層が少ないのは良いことですが、突破力を持った子どもたちをどう育成するかが問題だと思います。また、幸福度日本一ということで様々な指標が出ていますが、現状に満足してしまい、もっと良くしようとする意欲が薄いようです。志水先生の言葉では「交わる力」ということですが、子どもたちが個々に持っている能力を引き出し伸ばすことが大切だと思います。福井の子どもたちは、宿題はするが自主的に予習などはしないということも学習状況調査から明らかになっています。主体的に学ばせる方策を研究する必要があります。グローバル化の中、人口が減っていく中で、まず自分自身がどう社会に役立っていくか、どんなことを

するかを明確にもち、そのために今何を学ぶかという意志をもつことが大切です。そのため県は東京大学の先生方と、「希望学」という希望をつくるプロジェクトを、中学生対象に進めています。現在活躍する福井県ゆかりの様々な職種の方々に、「福井ふるさと教員」として直接授業をしていただき、将来の自分と今勉強しなければならないことを考える機会を高校生に与えています。

**松木** グローバル化した知識基盤社会における学力をどうやって培うかだと思います。学力テストで測れる知識量だけでなく、自分はどう考えるのか、どう生きてらよいかという自分づくりの問題と、他人との関係、コミュニケーションのなかでそれをどうやって作り出していくかの三つ巴状態を作り出していくことが今後の学力のあり方だと思います。

**秋田** 私は「ありのままがいい」と思う部分があります。足元の市民生活を大事にして作ってきたのが福井の教育です。そういうものが、実はこれからの時代に合っているのではないかと私は思っています。ただ、子どもは可能性をもっているのに、先生が「これでいいのだ」と思ってしまう部分は変えなければいけないと思います。「先生が自分を変えられるか」が課題ですね。

**志水** 私は今、大阪大学大学院で多文化共生社会の実現をリードするグローバルリーダー養成の責任者で、文科省の事業をやらせていただいています。大学院生に本と研究室だけではない研究をさせようということで、東北の被災地で話を聞くとか、ロンドンやトロントで英語を学びながらいろいろな経験をするとか、いろいろな事業所（NPO、学校、役所）で半年間（週1回）手伝いをし、課題を見つけてプロジェクトを作ってやっていくとか、いろいろやらせています。すべては「交わる力」で、頭だけではなく心と体を育てていく、それを小中高に応用していこうという話になるのでしょう。



**矢吹** 前川審議官、学習指導要領や学力育成のあり方はどうですか。

**前川** 今年の11月あたりに中教審に諮問して、次の学習指導要領の議論が始まります。教科のカテゴリーをどう克服するかを考えてもらいたいと思います。今は総合的な学習の時間と教科がうまくつながっていないと思います。教科と教科がクロスオーバーするような学習のあり方、その中で主体的に学ぶ力や協働的に課題を解決する力をつけていくことを考えていくべきです。合わせて、クリティカルシンキング、アクティブラーニングという方向に導くような指導のあり方や、そういう指導力のある教員を養成する方法についての議論が必要です。

**矢吹** 志水先生の本には、今日の話しきれなかった福井の秘密や、成果と課題についても掲載されていますので、ぜひお読みください。福井が昭和26年から積み重ねてきた実績を、簡単にまねることはできませんが、活用して、少しでも目の前のお子さんたちの学力向上に寄与していただきたいと思います。本日はありがとうございました。

### 意見交換会

1日目の最後に、シンポジストの方にもご参加いただき、また、福井大学教職大学院のスタッフも加えて、総勢200名を超える参加者で、意見交換会を行いました。様々な地域から多くの方に参加をいただき、活発な意見交換会となりました。参加者へ行ったアンケートでは「この意見交換会はとても有意義な時間だった」という感想が多数ありました。



学校公開

# 県内9つの小・中・高等学校を公開

福井教育フォーラム第2日目は、県内9つの学校を公開しました。学校の授業や諸活動の様子を公開し、教員・生徒と参加者との交流も行いました。その概要を紹介します。

## ○公開した学校の一覧

①-a		福井市旭小学校	参加者30名
①-b	授業名人による身の回りの事象を活かした算数指導	坂井市立春江西小学校	参加者33名
①-c		大野市下庄小学校	参加者45名
②	授業名人による身近なものを教材として活用した理科指導	福井市進明中学校	参加者61名
③	授業名人によるペア活動等で文章理解を深める英語指導	福井県立丹生高等学校	参加者14名
④	一つの部首からつながりのある複数の漢字を学ぶ「白川文字学」漢字指導	福井市宝永小学校	参加者41名
⑤-a	礼を重んじる教育活動を基盤とした学習指導	永平寺町永平寺中学校	参加者75名
⑤-b		永平寺町上志比中学校	参加者71名
⑥	教職大学院と連携した教科センター方式での授業研究	坂井市立丸岡南中学校	参加者47名

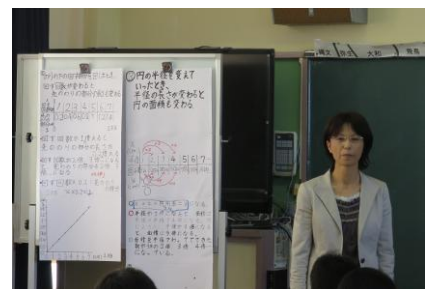
※公開内容などに応じて、参加定員を限定して実施しました

## ①-a 授業名人による身のまわりの事象を活かした算数指導

### ～福井市旭小学校～

#### ○伴って変わる2つの数量を仲間分け

身のまわりの様々な事象や現象の中から、「伴って変わる2つの数量関係」を探し出し、子どもたちで仲間分けを行いました。まず、各班1つずつ「数量関係」を発表しました。次に、その8つの「数量関係」について、各班で根拠を示しながら2～3の仲間まとめ直しました。その後、班やクラスで意見を出し合い、数量関係の特徴について理解を深めていました。



公開授業の様子

**【日程】**  
 9:20～ 9:30 日程説明・諸連絡  
 9:35～10:20 公開授業（算数・6年）  
                   「比例と反比例」  
                   勝木奈美恵 教諭  
 10:20～10:40 児童との意見交換・校内見学  
 10:40～11:20 教員との意見交換

子どもたちからは、「一方が増えるともう一方も増えるもの」「一方が増えるともう一方は減るもの」など、比例・反比例の関係につながる考え方や、表やグラフから比例・反比例の規則性をとらえる意見が出されました。授業者は、半径と円の面積の関係にも注目させるなど、中学校の内容にも踏み込んだ学習活動が展開されていました。

授業後の意見交換では、県外の参加者から、子どもたちの意欲的な学習態度や、一人ひとりの意見をつないで行われた授業についての、好意的な意見や感想が出されていました。

## ①-b 授業名人による身のまわりの事象を活かした算数指導 ～坂井市立春江西小学校～

### ○身近な数字を活かした、がい数とその計算

導入部分では、まず、身近に感じる数字（坂井市の小学4年生の人数）をもとに、がい数からもとの数を考える発問がされました。その後、がい数になる範囲を、数直線を使って視覚的に理解できることに、子どもたち自身の発言から気付かせていました。最後に、他の身近な数字（春江西小学校の4年生の人数）を使ったワークシートを活用しました。子どもたちは、本時の学習内容を踏まえて数直線を作り、がい数の範囲を図示できるようになりました。



春江西小学校

授業後、基礎的な生活習慣の確立や家庭学習の習慣づけのための実践事例（早寝・早起き・朝ごはんチェック表や家庭学習の手引き等）が学校から紹介されました。

参加者からは、「授業態度や姿勢の良さ」「一人ひとりの学習意欲の高さ」「教師と子どもとの良好な信頼関係が基盤となった落ち着き」が印象に残ったという感想をいただきました。

#### 【日程】

9:20～ 9:30 学校概要と取組みの説明

9:35～10:20 公開授業（算数・4年）

「がい数とその計算」

中村聡子 教諭

10:30～11:20 教員との意見交換

## ①-c 授業名人による身のまわりの事象を活かした算数指導 ～大野市下庄小学校～

### ○教室の中の「平行」と「垂直」を見つける

平面図形における直線の位置関係としての「垂直」「平行」について、初めて学習する授業でした。まず、直線について授業者が説明し、子どもたちは、教師が準備した角材や自分が持っている鉛筆などを使って2本の直線の関係を考え、話し合いながら、交わる場合と交わらない場合の2通りがあることを見つけました。その後、教室の中にある「平行」や「垂直」を見つける活動に取り組みました。子どもたちは教室中を見回して、窓枠や黒板の枠、ロッカーなど様々なところに隠れている



棒を使って、直線の定義を説明

「平行」や「垂直」を見つけ出していました。

共に学び合える時間が確保され、子どもたちは能動的に学習し、「算数が好き」「考えることが好き」と言える子どもが育つ授業が展開されていました。参加者からは、子どもたちが教え合う姿、「そういうことか」「すごい」などのつぶやく様子、児童への言葉のかけ方などを評価する声が多く聞かれ、「発言の多い子を中心に進めるのではなく、クラスが一体となった授業だった」という感想もいただきました。

#### 【日程】

9:40～10:10 学校概要と取組みの説明

10:20～11:05 公開授業（算数・4年）

「垂直・平行と四角形」

竹澤浩二 教諭

11:05～11:25 児童との意見交換

11:25～11:55 教員との意見交換



## ②授業名人による身近なものを教材として活用した理科指導 ～福井市進明中学校～

### ○鏡に自分の全身を映すことができるか

「光の世界」の単元で、「全身を映すにはどれくらいの大きさの鏡が必要か」という課題について、実験で確かめるという授業でした。毎日目にしてはいる鏡ですが、光の進む道筋について意識していた生徒はほとんどいません。理科で学習した光の反射の法則について、鏡を実際に使って確かめるということで、生徒たちは率先して実験に取り組み、活発な意見交換を行っていました。最終的にはロープ



授業の様子

を使って光の進む道筋を確認し、全身を映すためには身長のおよそ半分の大きさの鏡があればいいことを、作

図によって発見していました。参加者からは「子どもたちの表情が生き生きしていた」「落ち着いた雰囲気の中で探求的な活動ができるのは、日々の集団づくりの成果であると感じた」「考えを積極的に発表する生徒の姿に感動した」という感想をいただきました。日ごろから生徒たちの自然に対する興味や関心を高め、疑問に思ったことを自由に話し合える雰囲気をつくっておられる教師や学校全体の取り組みの成果が表れた授業でした。

#### 【日程】

9:20～ 9:35 日程説明・諸連絡

9:45～10:35 公開授業（1年・理科）

「鏡に当たった光の進む道筋」

浅川健一 教諭

10:35～10:50 生徒との意見交換

10:50～11:05 校内見学

11:05～11:50 教員との意見交換

## ③授業名人によるペア活動等で文章理解を深める英語指導 ～福井県立丹生高等学校～

### ○活動の充実により、「英語の授業が楽しい」

福井型中高一貫教育の研究実践校である丹生高校は、「知・徳・体」の調和のとれた活力ある人間の育成を目指しています。今回のフォーラムでは、高校唯一の公開校として、英語の授業を公開していただきました。

授業は、4技能（「リスニング」「スピーキング」「リーディング」「ライティング」）が統合され、オールイングリッシュで進

められました。ペアでの「Word quiz」や音読に加え、自分の意見や考えをまとめて発表するなど、表現活動が中心でした。生徒は積極的に自分の意見を英語で表現しており、授業者との良好な関係や「間違っても大丈夫」という雰囲気を感じることができる授業でした。



公開授業の様子

授業の後半は、生徒のグループに参加者が入って意見交換が行われました。「高校生になって英語の授業がおもしろくなった」と話す生徒に、参加者の一人は、「中学教師として英語嫌いを少なくすること、力をつけることを心がけていきたい。」と述べていました。話題は中高一貫教育や家庭学習まで広がっていました。

#### 【日程】

9:25～ 9:45 学校概要と取組みの説明

9:55～10:45 公開授業（英語・3年）

「Just Out of Curiosity」山口隆子 教諭

※授業の後半は生徒とのディスカッション

10:55～11:15 校内見学

11:20～12:00 教員との意見交換

## ④一つの部首からつながいのある複数の漢字を学ぶ

## 「白川文字学」漢字指導

## ～福井市宝永小学校～

## ○「羊」に関連する漢字を調べよう

福井県では、県内全ての小学校で、「白川文字学」を活かした漢字学習を平成23年度から取り入れています。漢字の成り立ちを知ることで漢字への興味・関心を高め、楽しく体系的に学びながら、ひいては語彙の拡充や表現力の向上を目指しています。

参加者からは「羊という漢字から、美、善の学習に広げ、さらには繕・鮮・痒と学年を越えた漢字を学ぶ、体系的で効率的な漢字学習の面白さに感動した」「子どもたちが主体的に調べ、



「羊」の部分を持つ漢字と絵を組み合わせて

感じたことを堂々と語る姿に、漢字だけに終わらない学習の成果を見ることができた」という感想をいただきました。また、副読本や指導書、解説本、カリキュラムは、行政と約100名もの教員が協力して作った教材であることに驚き、「福井県は一致団結して教育に取り組んでいる」「漢字の力⇒言葉の力⇒学力と繋げるために、教員が努力してきた跡が見てとれる」との声が聞かれました。

## 【日程】

9:20～ 9:30 日程説明・諸連絡

9:35～10:20 公開授業（国語・6年）

「羊ってすごい」

竹内恵美子 教諭

10:20～10:40 児童との意見交換

10:40～11:20 教員との意見交換

## ⑤-a 礼を重んじる教育活動を基盤とした学習指導

## ～永平寺町永平寺中学校～

## ○「無言清掃」で心を磨く

NHKの「家族に乾杯」で「校門での礼」などの様子が紹介されて、全国的にも有名になった永平寺中学校ですが、今回のフォーラムでは、「無言清掃」や「黙想」の様子を公開していただきました。

授業終了3分後には音楽が流れ始め、生徒たちは服装を整えて清掃の準備を始めます。3分後に音楽が変わると、黙想正座をします。音楽終了と同時に始まりの大きな挨拶があり、手際よく雑巾がけが始まります。一人あたりの持ち場は広いのですが、常に走って行動し、無駄がありません。この基本の清掃は8分間です。区切りの音楽が流れ、最後の2分間は『+αの清掃（自ら気づいて掃除をする時間）』になります。4曲目で後片付けを始め、5曲目で最後の黙想正座を行います。5曲目が終



無言清掃の様子

わると反省会があり、掃除の時間が終了します。

清掃は縦割りで行われます。上級生が難しい仕事を積極的にこなす姿を見て、下級生が憧れ、まねるようになるそうです。「無言清掃」は30年近く受け継がれています。参加者からは、その歴史と生徒のひたむきな姿に対して、驚きと感動の声が上がっていました。

## 【日程】

9:15～10:25 学校概要と取組みの説明

10:25～10:45 清掃活動の見学

10:45～11:05 教員・生徒との意見交換

11:10～12:00 授業公開

## ⑤-b 礼を重んじる教育活動を基盤とした学習指導

### ～永平寺町上志比中学校～

#### ○「礼の心」教育で「確かな学力」と「豊かな心」を育む

「礼の心」教育を始めて30周年を迎えた上志比中学校では、「無言清掃」と授業の様子を公開していただきました。

上志比中学校では、朝の校門等での礼や無言清掃、無言給食により、他者への思いやりの心を育てています。当日は、「食堂入室する際に自然と一礼する姿」「膝をつき隅々まで拭き続ける姿」「たった6～7名で汗を流して体育館の床を拭く姿」などが見られました。

全クラスでの公開授業では、リラックスした雰囲気の中で生徒は活発に発言していました。しかし、誰かが発表を始めると教室内は自然と静まります。その姿から、生徒たちの心の育ちが見えました。参加者との意見交換では、質問に対して礼儀正しくはきはきと受け応えしており、自己肯定感の高さや学校に対する自信を感じました。



#### 【日程】

- 9:40～10:20 学校概要と取組みの説明
- 10:25～10:40 清掃活動の見学
- 10:40～11:00 教員・生徒との意見交換
- 11:10～12:00 授業公開

参加者からは、美しい校舎や生徒の姿に、感動と驚きの声が上がりました。「『礼の心』の実践は授業でも生きており、学力、さらには生きる力の育成にもつながっていると感じた」といった、「確かな学力」と「豊かな心」の育成を評価する声が聞かれました。

## ⑥ 教職大学院と連携した教科センター方式での授業研究

### ～坂井市立丸岡南中学校～

#### ○「学校拠点校」としての組織的な実践

坂井市立丸岡南中学校は、県内で初めて教科センター方式を取り入れました。生徒は、毎時間、教科専用教室に移動して授業を受けます。専用教室付近には、メディアセンターと呼ばれるオープンスペースが配置されており、生徒は気軽に教科担当教員に質問できるようになっています。

平成20年度から福井大学教職大学院の拠点校となり、在職しながら大学院で学ぶ教員がスクールリーダーとなり、大学スタッフの指導助言を受けて、組織的な協働研究に取り組んでいます。また、教職を目指す若い大学院生が実践的に学ぶ場にもなっています。当校の研究主題である「学び合う学校文化の創造」のもと、学校・大学が学びのコミュニティを形成し、有機的に結びつくことで、授業デザインや生徒会活動、学校行事など、生徒の主体的な学びの活性化につながっています。参加者は班に分かれ、大学のスタッフの進行で質問や感想を述べ合いながら理解を深めていました。



教員によるグループ協議の様子

#### 【日程】

- 9:15～ 9:35 ガイダンス・日程説明
- 9:35～10:25 校内見学
- 10:25～10:40 生徒との意見交換
- 10:45～11:05 全体説明
- 11:05～11:30 教員等とのグループ協議

# 研究発表会案内（嶺南教育事務所）

平成26年度 嶺南教育事務所

発表会開催20周年

## 教育実践交流会

参加者募集

1 期日 平成27年2月19日（木） 広げよう！学び合いの輪

2 会場 福井県教育庁嶺南教育事務所（小浜市遠敷2丁目205）  
福井県立若狭歴史博物館（小浜市遠敷2丁目104）

3 日程

12:00 13:00 13:30 13:40 14:30 14:50 15:40 16:00 16:50

開 場	開 会 式	移動	第一発表	休憩・移動	第二発表	休憩・移動	第三発表
			① ② ③ ④	① ② ③ ④ ⑤	① ② ③ ④ ⑤		



早めにお越しいただき  
H26年7月にオープンした若狭歴史博物館を御見学ください。

### 4 発表主題・発表者一覧

13:00 ~13:30	第1発表 (13:40~14:30)	休憩	第2発表 (14:50~15:40)	休憩	第3発表 (16:00~16:50)
① 開 会 式 〔若狭歴史博物館1階ロビー〕	①土曜授業の実践 ～ふるさと教育・キャリア教育・学力体力の向上をテーマにした土曜ならではの教育活動～ 若狭町立上中中学校 校長 松宮 高宏 若狭町立三宅小学校 校長 上野 庄一 若狭町立瓜生小学校 校長 中村 正人		①体験活動を通した、地域の食を大切にし、 食べることを大切にする子を育てるための取組 高浜町立高浜小学校 栄養教諭 山口 貴子 高浜町立青郷小学校 講師 竹内 美恵		①「分かる・楽しい授業づくりに活かすNIE」 小浜市立雲浜小学校 教諭 小林 守
	②「ふるさとに誇りを持ち、 未来へ大きな志を持つ子」を育む ～映像を利用した校長講話～ 小浜市立内外海小学校 校長 岩崎 好信		②活用力を育てる算数授業 小浜市立松永小学校 教諭 小林 香織		②校内支援体制の充実と教職員の意識の向上を めざす特別支援教育コーディネーターの働きかけ 小浜市立小浜小学校 教諭 小坂 恵
	③体験と言葉の往復を重視した 生きる力の育成 小浜市立遠敷小学校 教諭 稲葉 隆		③伝え合い、深め合う子の育成を目指して ～H25.26年度 小浜市授業力アップ研究指定報告～ 小浜市立西津小学校 教諭 杉山 由紀		③学力向上対策室の取り組み ～1年間の活動を通して～ 県立教養高等学校 教諭 高橋 克弘 同 教諭 丸谷 寛 同 教諭 山田 剛史
	④学校規模適正化を見据えた取組に ついて考える 嶺南教育事務所研修課 研究員 山本 毅		④すべての子どもがわかる授業を目指して ～ICT(タブレット)を活用した授業展開の在り方～ 嶺南教育事務所研修課 研究員 京岡 成典		④いじめの未然防止に向けた自己有用感を 高める指導の在り方 ～校内研修と児童生徒に対する実践的指導～ 嶺南教育事務所研修課 研究員 竹原 誠
			⑤人権教育のさらなる充実を目指した 教職員研修の在り方 ～人権教育が学校の中で日常化するため、 私たちが身につけていきたいもの～ 嶺南教育事務所研修課 研究員 上北 理加		⑤嶺南発「福井型18年教育」 ～算数・数学における嶺南地域の課題と指導の在り方～ 嶺南教育事務所研修課 研究員 伊藤 元宣



“鳳仙花”は、全世界でわずか5人の無鑑査製作家であり、「東洋のストラディバリ」と言われた陳昌鉉さんが製作されたバイオリンです。「鳳仙花を愛する会」のご厚意により、このバイオリン“鳳仙花”によるミニコンサートを開催することとなりました。是非この機会に「東洋のストラディバリ」と言われた陳昌鉉さんのバイオリン“鳳仙花”が醸し出す心温まる音色をお聴きください。

☆嶺南教育事務所では、平成26年度「教育実践交流会」（第20回教育研究発表会）を上記の日程で開催いたします。教育実践交流会では、嶺南地区の随学校および教育関係機関等に勤務する教職員が、教育活動に関する研究や実践の発表をもとに交流を行い、互いに学び合うことで嶺南の教育の向上を図ることを目的としています。多数のご参加をお待ちしています。

### 5 その他

☆自動車でお越しの際は、できるだけ乗り合わせをお願いします。

☆開会式・ミニコンサートは若狭歴史博物館1階ロビーで行います。

☆お問い合わせは、嶺南教育事務所 研修課 まで。

【TEL：0770-56-1302 FAX：0770-56-1391】